花と心に囲まれて

高橋 治

花と心に囲まれて

高橋 治

講談社

高橋　治（たかはし・おさむ）
昭和四年千葉県生まれ。東京大学文学部国文科卒。松竹株式会社に入社、昭和三十五年より監督作品、戯曲を発表し、昭和四十年退社。以後、本格的な執筆活動を開始、昭和五十九年「秘伝」で第九十回直木賞を受賞。昭和六十三年「別れてのちの恋歌」（新潮社）、「名もなき道を」（講談社）で第一回柴田錬三郎賞受賞。主な作品に「うず潮のひと」「流域」（講談社）、「絢爛たる影絵」（文藝春秋）、「風の盆恋歌」（新潮社）、「くさぐさの花」（朝日新聞社）などがある。

花と心に囲まれて
1992年2月25日　第1刷発行

著　者　高橋　治
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二―〇一
電話　東京（〇三）五三九五―三五〇五（編集部）
（〇三）五三九五―三六一二（販売部）
（〇三）五三九五―三六一五（製作部）
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂
定　価　一五〇〇円（本体一四五六円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。
© Osamu Takahashi 1992 Printed in Japan

ISBN4-06-205576-7　（文2）

花と心に囲まれて　＊　目次

わが人生の郷愁列車 9
わが人生の郷愁列車 11
小津監督作品をどう見るか 15
見事な先人 23
小津の戦争 23
皇帝の兵 24
鮭と戦争 25
多摩川の鮭 27
度がすぎる 28
旅の憂さ 29
一人前の文化 30
准将の食 31
無能教授〈Ⅰ〉 32
無能教授〈Ⅱ〉 34

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

もっと映画を　35
松竹大船の黄金の日々　36
一人一人の藤原審爾　39
シベリア戦争について　43

金沢との出会い

金沢との出会い　67
若狭　小浜紀行　69
「僻村学校」を作る　73
歴史の道〈僻村にて①〉　85
天領の誇り〈僻村にて②〉　89
山村の豊かさ〈僻村にて③〉　91
宿題〈僻村にて④〉　93
開校へ向けて〈僻村にて⑤〉　95
97

地方文化の意味 100
花と海とやきものと 119
壺狂いの記 121
李朝を使う 127
藍手古九谷の皿 130
常滑讃歌 133
唐九郎その無冠の死 139
歴史の人を見た 142
木のぼりサザエ 148
養殖ハマチと沖アミ 152
怪物のおこぼれ 156
庭の槙の木 159
金を食う木 164

つつじ狂い 166
野草写しのきもの 170
刻とまれ、桜のきもの 173
酒の味について 176
芭蕉嫌い 178

愛について

相手の中に生きる 181
愛の不安。原因は誰にある 183
与えよ、求むべからず 192
男と女を結びつける相乗効果を 196
愛には常に望ましからざる側面がある 200
206
あとがき 213
掲載紙誌一覧 215

装画・風間　完
装丁・熊谷博人

花と心に囲まれて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

わが人生の郷愁列車

わが人生の郷愁列車

鉄道官舎というものはまだ存在するのだろうか。

人の幼時体験をどこまで遡ることが出来るのかというのは、しばしば話題になる興味尽きない問題である。私にとって、最も古い記憶は、総武線の佐倉駅前にあった鉄道官舎と不即不離なものになっている。

いいかえれば、私の人生は鉄道官舎から始まっている。一九三三年十一月、私の父は佐倉機関区の助役に任命された。三十四歳の時のことである。高等小学校にさえやってもらえなかった人間にしては、異例といってもよい出世の早さだろう。

父は不思議な男だった。ついに、どうしてそんなことが出来たのかは、くわしく聞かずじまいだったが、長男の私が四歳になったこの年の秋の転任前に、千葉市に二軒の家を持っていた。

二軒とも、それこそ鉄道官舎に毛の生えたような家だった。当時、家作を持つというのは、大なり小なりその程度のことからスタートしたものらしい。無駄遣いを最も嫌った父の生き方から考えると、この小さな二軒の家も、爪に火をともすようにして建てたものだろう。

その中の一軒を人に貸し、一軒に私たちが住んでいた記憶がおぼろげにないではない。だが、具体的な状況や環境の点で、だいぶ不確かなところがあるのだから、それらの記憶は、後年、私が両親や姉から聞かされた話によって再構成したものだろう。

だが、佐倉の鉄道官舎となると、間取りはもちろん、宿舎が並ぶ一画の中央にあった共同浴場まではっきり覚えている。その宿舎に、坂田さんという一家が住んでいた。

先様は駅長だったし、末娘が私より一歳年上だったのだから、父よりはだいぶ先輩になるのだろう。最年長の長男の下に娘三人という家族構成で、幼い男の子が欲しかったのか、私は坂田さんの家の子同然に育てられる。

その辺が鉄道官舎の良さであり、一家意識の強い国鉄の良さでもあるのだろう。そうしてかわいがられたのに端を発して、子供の身にすれば、ひどい重荷を背負わされてしまうことになる。

というのは、坂田さんの長男は抜群の秀才だったからだ。彼は坂田さんが船橋駅に転任になったのを機会に東京の府立三中に進み、旧制水戸高校から東大、高等文官試験合格と、一路エリートの階段をかけ上っていった。

小童の私など、この人の前ではろくに口もきけないほどだったのに、名にし負う一家意識がここで余計なことをする。坂田家の次男もどきの私も、当然、秀才長男の後を行くものだという期待につながってしまった。期待される側にすると、これほど迷惑な話も少ない。なにせ、行く学校まで決められてしまっているのだ。

この期待に、さらに拍車をかける役割を果たす人物に、父は間もなく出会う。それが後年あの劇的な死を遂げる下山定則氏なのである。

私は待たれていた長男だったので、母に猫かわいがりされたせいか、幼時、あまり健康ではなかった。来年は小学生になるという一九三五年五月の誕生祝いも、病気のために次々と延期された。まあここまで回復すれば、赤飯をたいてやってもよいだろうということになったのが、翌

三六年二月に入ってからである。

そのころは官舎を出て、佐倉の町とは反対側の丘の上にある農家の離れを借りていた。長い坂を下っていくと、大踏切と呼ばれた幅の長い踏切があって、その左側が駅になる。

自分が祝ってもらえるのが嬉しかったのだろう、私は坂の上の桑畑の中に立って、大踏切の方から帰って来る父を待っていた。朝からの雪でひどく寒かった。母に何度か呼び帰されたが、私はあたりが真っ暗になるまで父を待っていた。

だが、その夜、父はとうとう帰らなかった。あとでわかったことでは、その朝、東京の中央部で起こった反乱事件の鎮圧部隊を送り出すために、父は生涯で最も多忙な一日を送っていた。息子の誕生日どころではなかったのだ。

この二・二六事件鎮圧部隊突貫輸送に際して、現場指揮をとった佐倉機関区助役の仕事を、千葉の運輸事務所から注目していたのが、後に国鉄総裁になる下山定則氏だった。恐らく、超エリートが誰でも経験させられる地方回りに出ていたのだろう。

下山氏は事件直後に父を佐倉から千葉の運輸事務所に栄転させ、自分の助手にする。

「俺のひきがあっても、学歴のないお前では先が知れてる。息子だけは大学にやれよ」

下山氏は何度か父にそういったという。坂田家の長男にもまして、父の決心を固めさせる強力な刺激が、父の前に現れたのだ。かくて、私の身の不幸は、五、六歳のころから、空前の教育パパと化した父親を持ったことに始まっている。

父にすれば、息子に夢を託す学資も稼ぎたかったし、自分自身が栄達出来る限界もひろげたかったのだろう。下山さんに出会った三年後には、中国北部に設立された国策会社に移った。そし

て、国家の野望の挫折が、とりも直さず自分の野望の挫折となり、二軒の家作も売り払っていったために、全くの無一文になって日本に帰って来た。

そして、そんな失意の男を引き取ってくれるところは国鉄しかなかった。嘱託から出直して、勝浦機関区助役大原在勤で、国鉄マンとしての生涯を終える。一九五四年退職。考えてみれば、私の幼時記憶が始まっているころから退職まで、ただ回り道をしただけで、仕事の格はほとんど上がらなかったことになる。

抗い難い波に押し戻されたとはいえ、思えば哀れな父の国鉄人生だった。そのうえ、もうひとつ、大きな失意が父を訪れる。

一九五〇年の冬、私は父の大原の官舎を一人で使わせてもらった。父は一時間ほど離れたところにある母の実家から通勤し、空いていた官舎で私が大学の受験勉強をした。父は最後まで私が法学部に進み、自分の夢をついでくれるものと思っていたらしい。だが、私が選んだのは文学部だった。

「……なんだ、文学部？」

そういった時の、父の顔に浮いた絶望の表情が私には忘れられない。希望の出発も鉄道官舎だし、それが無残に散ってしまったのも鉄道官舎だった。

国鉄の分割民営化が進んでいる。父の希望をくじいてしまった私は、国鉄変貌の話を聞かずにこの世を父が去ったことを、心から喜んでいる。父がどれほどその激変を憤り悲しむかが、親不孝な長男だっただけに、私にはよくわかるからだ。それは私にとっても同様である。国鉄がなくなることは、私には故郷を奪われる思いに通ずるからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.